

## 2014年度 「研究助成基金」 成果報告書

活動名称：Pattern Languages of Programs Conference における研究発表、 ワークショップ及び学会前後のインタビュー
形式： その他、国際学会(研究発表と向上支援のためのワークショップ及び学会前後のインタビュー)
開催(活動)日： 2014年 9月6日～2014年 9月23日
会場あるいは実施場所：アメリカ ノースカロライナ州、イリノイ州

本研究は、ソーシャルアントレプレナーシップ(社会起業家精神)の概念や社会の問題を解決する『コツ』をパターン・ランゲージの手法を用いて言語化することで、自ら問題を解決していくような「チェンジメーカー」を育てることを目的としている。今回の活動では、まずは、学会前にパターン・ランゲージ関係者であるマリリン・マンズへのインタビューを行い、パターン・ランゲージの発展背景、変革を担う若者の育成方法について伺った。また、研究成果をPattern Languages of Programs Conference (PLoP)2014 というアメリカで開催されるパターン・ランゲージの国際学会の場で研究発表を行い、専門家から向上・改善のためのアドバイスをもらうだけでなく、パターン・ランゲージの歴史を築いてきた複数の人々に対して学会のコミュニティの未来について考えるワークショップを実施した。以下、具体的な成果を報告する。

### ・ノースカロライナでのマリリン・マンズへのインタビュー

マリリン・マンズは『Fearless Change』という著作で組織において新しい技術を導入するためのパターン・ランゲージを提案し、以降、組織変革やリーダー育成の分野で研究を進めている。彼女が強靱を取るノースカロライナ大学アッシュビル校では、生徒に主に経営学を教えつつ、社会起業家輩出のための大会を主催しているので、本研究分野との高い関連性から、

『Fearless Change』の作成背景や工程だけでなく、パターン・ランゲージの教育分野における応用・展開方法を伺った。具体的には彼女が教育指導を行う授業では、事前課題として生徒に著作を読ませ、授業当日に即興やスキットを用いてパターンを表現させ、パターンの理解を促進した。さらに、彼女が用意したケーススタディーに対して、パターンを利用した解決策を考えて発表させるグループワークを行っていることを共有してくれた。インタビュー後も、チェンジメイキングパターンを教育現場に普及させていくために、適切な手法についてのアドバイスを受け、パターン・ランゲージを作成しただけで終わらずに、実践の場での様々な活用方法があることを学んだ。

### ・PLoP2014 での研究発表・内容改善

本学会では論文に記したように、災害対策や少子高齢化をはじめとする社会問題をより多くの個人が解決しなければならないというパターン作成に至った背景、パターンのワークショップや教育プログラムへの応用方法や、今後のパターンの教育分野への応用の提案を発表した。各論文は Writer' s Workshop というワークショップで参加者によって、改善点や疑問点について議論されるのだが、既存の体系化されたパターン・ランゲージのほとんどが冊子で展開されている一方で、本研究の最大の特徴であるワークブックの形式が大きく評価された。ワークブックの形式は、読み物と化してしまいがちな冊子を、より参加者が当事者意識を持ってパターンの理解を深め、使いこなすために作成したことから、Writer' s Workshop では、“読者が書くという行為を通じて、脳内の考えを繋ぐことが出来る” というコメントをもらい、パターン理解を促進する手法として成果を残すことが出来た。

#### ・ PLoP2014 での Future Language Workshop

今回の学会では、研究発表のみならず、「理想的なパターン・コミュニティ」をテーマに、未来についてのビジョンを言語化する Future Language Workshop のファシリテーターを務めた、井庭研究室独自の分野である研究内容を世界に共有した。学会主催者を含めた十数人でワークショップを実施した結果、パターン・コミュニティが現在抱える問題点が幾つか判明した。一つは、パターン・ランゲージの学会参加者に多様性があまり見られないことである。パターン・ランゲージは建築の分野から始まり、ソフトウェアの分野に発展し、学会が形成され、参加者の多くはソフトウェア開発関係者やエンジニア職であることから、パターン・ランゲージの他分野への普及が進まない問題が生じていることが明らかとなった。これに対し、人間行為におけるパターン・ランゲージの普及を目指す、井庭研究室の研究内容はコミュニティに新しい風を吹かせる影響力を持っていると確信したとともに、今後も研究協力者を巻き込むべきという指針が生まれた。二つ目の問題点は事後のフォローアップ不足によってコミュニティの結びつきが弱いことである。学会当日までは、各々論文の加筆・修正やメーリングリスト等でのやりとりは活発にだが、学会終了後は参加者同士のコミュニケーションは減少してしまうことを問題視し、議論を進めていくうちに、ビジネス業界のソーシャル・ネットワーキング・サービスの一つ、LinkedIn を活用する解決策が生まれ、参加者によって実装された。

以上の活動から、学会に参加して議論を行うことで、本研究の今後の具体的な展開方法や改善策を学んだのみならず、パターン・コミュニティの未来を議論するワークショップのファシリテーターを勤めたことで、井庭研究室がコミュニティにおいて大きな影響を与える成果を残したと自負している。